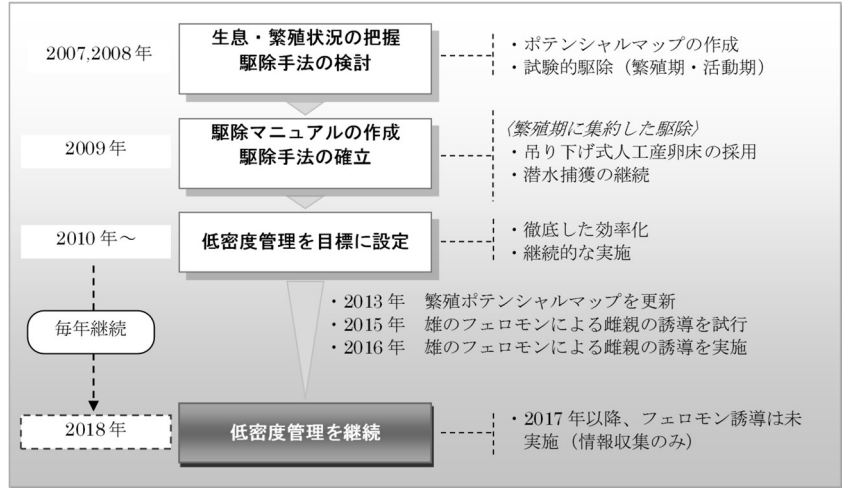


苫田ダムにおけるオオクチバス管理の現状 その2

○笹田直樹・白神義章・篠原隆佑（株式会社ウエスコ），中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）

岡山県北部に位置する奥津湖（苫田ダム管理所による直轄管理のダム湖）では、オオクチバス *Micropterus salmoides* の低密度管理を目的とする調査、研究、駆除作業が10年以上にわたり実施されてきた。奥津湖で実施されている駆除作業には、主に以下の特徴がある。



- ①繁殖抑制に特化した駆除作業であり、吊下げ式人工産卵床による卵の駆除、ヤスによる親魚の駆除、自然産卵床の破壊、仔稚魚の駆除を主体とする。
- ②広大なダム湖を対象とするため、事前に作成・検証した繁殖ポテンシャルマップに基づいて、作業の効率化を図っている。
- ③駆除作業は、繁殖期間中（水温16～23℃前後）、1週間に1回、ダム湖内を船で移動しながら、2名がスノーケリングにより実施している。

その結果、2016度の調査まで、潜水目視による個体数、産卵数が着実に減少していた。ところが、2017年の調査では、‘リバウンド現象’とも捉えられる自然産卵床の増加が確認された。この現象について、2018年の調査結果、流域の視点も合わせて考察した結果を紹介する。

なお、本報告は、国土交通省苫田ダム管理所が実施している業務成果の抜粋である。情報の公表についてご理解を頂いたことについて、この場をお借りして感謝の意を申し上げます。

